札幌市立定山渓中学校

実施日：平成 23 年 11 月 21 日（月）13:40～14:30
講　師：三船　志代子氏（択捉島出身）

皆さんこんにちわ。ただいま先生から紹介のありました三船志代子と申します。

私は、北方四島の一番北にある択捉島、その北にある「蘂取村（しべとろむら）」という小さな村で生まれました。蘂取村の「蘂取」とはアイヌ語で「大きな川のあるところ」という意味だそうです。今日は私の生まれた蘂取がどんなところか、人々がどんな暮らしをしていたのか、戦争が終わってからロシア人がやってくるのですが、その時の様子、また強制送還により出て行かなければならなくなったときの様子の話をします。

始めに、私が生まれた蘂取村がどんなところだったのかお話しいたします。墓参とか自由訪問で蘂取に行くことができます。蘂取に行くには根室の港から船で行きます。着くまで一昼夜かかります。１４５km あるそうです。ロシア人ハンターに守られながら上陸するのですが、村はすっかり自然に帰っており、人は住んでおりませんが、ヒグマはたくさん住んでいます。学校があったところには、門や松の木、神社の土台などが残っています。また、小高い丘の上にはお墓があったのですが、墓石が捨てられ 1 箇所に集められていました。これらを見ると人が住んでいたのがわかります。ここに「ばあちゃんのしべとろ」という絵本があります。この絵本は、今から１０年前、子供達にもっと島のことを知ってもらいたく、コンクールで最優秀に選ばれた本です。作者は私、「三船志代子」。絵を描いていただいたのは娘の同級生の「はやしまきこ」さんです。ここで読んでみますので、蘂取はどんなところだったのか、皆さん想像しながら聞いて下さい。

（絵本の朗読）

※絵本の内容は浦河町立萩伏中学校に掲載

（おわり）

次に、人々がどんな暮らしをしていたのかお話しさせていただきます。昔から魚は獲れていたそうです。世界の三大漁場の一つと言われていましたから。今から２００年位前に、高田屋嘉兵衛（たかだやかへい）が漁場を作りました。ある時、信心深かった高田屋嘉兵衛は、各漁場に一体ずつお地蔵様を安置して、豊漁を祈願したそうです。ですから先程絵本に出てきたお地蔵様もこんな風に書いてありましたけれども、本当はお座りした立派なお地蔵様だったそうです。その１７体のうちの一体だったということを絵本を書いてから知りました。村の多くの人々はこの漁場で働きました。また、魚が獲れる季節になると多くの出稼ぎの人がやってきてここで働きます。出稼ぎの多くの人は、東日本大震災のあった東北地方の方が多かったようです。冬が来て漁が終わると切り上げ、出稼ぎの人達はそれぞれの地元に帰っていきます。村は静かになります。寂しくなります。でも村では青年団や子供まで村の主な人達で歌舞伎を上演したそうです。村人はご馳走を持って会場となる公会堂（今の公民館）に集まって楽しんでおりました。村長さんはいつでも主役を務め、私の父などは女形をやっていたそうです。後ほど父のアルバムをお見せします。蘂取村は本当に小さな村でしたけれども、豊かな暮らしをしていたようです。幼かった私が島で一番楽しかったことは、川や海で遊んだことです。きれいな砂浜が続く浅い海には小さいカレイの子がたくさんいるんです。カレイの子は砂の中に体を半分以上隠して、

頭だけ出して目が光るのですぐ見つけることができます。これらを子供は足で踏んだり、手ぬぐいを広げてすくって遊びます。でもカレイの子は素早くて、砂をまき散らして逃げ回るので私たち幼い子供にはなかなか捕まえることができませんでした。絵本にもありましたけれども、岩場に行くと花咲ガニがいっぱいいて、これを捕まえて遊ぶのがとってもおもしろかったです。村の暮らしと言っても今から６５年以上前の話ですから、もちろん電気・水道はありません。明かりは石油ランプです。皆さん石油ランプはわかりますか。これ見たことあると思うのですけれど。このガラスの部分をホヤと言います。ホヤの掃除は毎日するんですけれども、丁度子供の手が中に入るので、私もお手伝いいたしました。水は井戸もありましたけれども、町の中央に大きな水槽の入った建物があり、山から樋、樋ってわかりますか、木で作ったホースと考えて下さい、その樋で水が運ばれておりました。冷たくてとてもおいしい水でした。それぞれの家庭には大きな樽とか水瓶が置いてあって、町の水槽から天秤棒で水を運びました。暖房は薪ストーブです。そしてストーブの前には大きな炉が切ってあって五徳に鉄瓶などをかけておくと、お湯はいつでも沸いており、温かいお茶などはすぐに飲むことができました。電話は郵便局とか役場に何台かありました。町にはお店が１軒ありました。このお店は、今のスーパーマーケットのような存在で何でも売っておりました。お米や味噌、醤油、お酒、衣料品、薬、日用雑貨などなんでも売っておりました。また、通信販売も行われていたようです。私の父は、東京銀座にある三越から買ったと話しておりました。子供の下着などはこのお店で売っておりましたが、母の和服などは、ほどいて自分で洗い張りをし、染め直し、縫い直して、今で言うリフォームをして着ておりました。

冬になると海が荒れて流氷が来ます。それで船の往来ができなくなります。それで冬に必要な生活物資はまとめ買いをしていたようです。たとえば、私の家ではリンゴは籾殻の入った木の箱（リンゴ箱）（今のような発泡スチロールではありません）を一箱、二箱と買っておりました。また、畑の野菜のイモ、ニンジン、ダイコン、ゴボウ、キャベツなどたいていのものは穫れました。他にキュウリ、ナスビ、豆類も作っていたようです。山菜などは春早くから採れておりました。ボクサ（行者ニンニク）、ゴチャック（ニンジンの葉っぱのようなもの）、ウド、蕗、ユリの根などがあります。

ソ連の兵隊がやってきたときの話をします。戦争が終わって、のどかで平和だった村にソ連の兵隊がやってきました。戦争は昭和２０年８月１５日に終わっておりましたが、村にソ連の兵隊がやって来たのは、昭和２０年９月末のことと聞いております。小さかったので詳しいことは分かりませんが、ソ連が入って来たら大変なことになるぞととても心配していたようです。私の家の前には村役場があり、人々の出入りは良くわかりましたが、窓を締めて見てはいけないと言われました。しばらくした頃、夕方だったのですが外が騒がしいので、見てはいけない窓からそっと覗きました。ソ連の兵隊が踊っていました。一人がアコーディオンを弾いて、もう一人が踊っておりました。今考えるとコサックダンスをしていたんでしょうね。とても陽気な人々と思いました。間もなくロシア人の家族連れも村にやって来ました。しかし、住む家がありません。駅逓（えきてい）や旅館などが没収されてロシア人が住むことになりました。皆さん、駅逓は分かりますか。定山渓にも駅逓はあったと思います。昔は、交通手段と言えば馬です。人の他に馬の世話をしてくれる宿屋を駅逓と言いますが、駅逓も旅館も建物が大きいのでソ連の兵隊に占領されてそこに住んだのですが、それでも足りませんので、日本人の民家、一般家庭にもロシア人が入って来て、一緒に暮らすことになりました。私の家にもロシア人の家族が入りました。時々、日中女性が遊びに来てパンの焼き方などを母に教えておりました。ロシア人が来てから学校も半分にしました。学芸会など学校でできなくて、お寺の本堂に舞台を作って踊りや歌や劇などをしました。このお寺は立派なお寺でした。

強制送還といって島から引き揚げることになりました。その時の様子をお話しします。終戦から２年経った昭和２２年８月に引き揚げることになりました。学校は夏休みで、私たち子供は家におりましたので、お友達にさよならも言えませんでした。引き揚げるとき、私は小学校３年生、引き揚げの通達が来てから慌ただしく

荷物をまとめ、引き揚げる人達は岩場を超えた砂場に集められました。ところが、引き揚げることになった人々は村人の半分でした。どのようにして選ばれたのか分かりません。たとえば老人のいる家族とか、幼い子供がたくさんいる家族とか、それとも単純にロシアの命令だったのか、良く分かりません。残った人達は、もう１年間ロシア人と共同生活をして、翌昭和２３年に引き揚げることになります。引き揚げの時、私の家族は父、母、４人の子供で６人でしたけれども、他に夫を亡くした伯母の家族８人も一緒でしたから、１４人の長として３０歳台の父は大変だったろうと思います。引き揚げ船に乗るとき、蘂取は一番北にありますから、蘂取の人が一番初めに乗りました。蘂取の海は遠浅ですので、大きな船は沖に泊まっていて艀、小舟で乗り降りしなければなりませんでした。この艀に荷物と一緒に乗せられた私は、生まれて初めて船に乗るので、嬉しくなってしまいました。澄んだ海の底を覗いてはしゃいでおりました。でも不安そうな大人の顔、また既に船酔いでもどす人など色々でした。引き揚げ船はロシアの貨物船でした。それから何日もかかって次々と島の人達を乗せました。船底から甲板まで人でいっぱいになりました。しかも、船の中は不衛生でした。蚤、シラミ、南京虫、その他トイレのこと、飲み水のこと、食べ物のことなど不潔で不自由なことがいっぱいでした。私たちを乗せた引き揚げ船は、根室の港ではなく、サハリン（樺太）の真岡港（まおかこう）というところに入り、上陸しました。宿舎となる女学校まで延々とひたすら歩き続けました。大人も子供も老人も、小学校３年生だった私は、背中に大きなリュックサックを背負っているのでとてもつらいものでした。すぐ下の妹は小学校１年生で一緒に歩きました。その下の妹は４才で父の背負った荷物の上に肩車、その下の妹は乳飲み子で母がおんぶしておりました。そんな格好で他の家の人もみんなただただ黙々と歩きました。宿舎になった学校は、まだ９月上旬というのに、寒くて眠れない夜もありました。しかもトイレが外で、遠いところにありました。途中ソ連兵が銃を持って監視していました。とても怖かったです。間に合わなくて途中で済ませたことも何度もあります。引き揚げの時、荷物も制限されました。一人３０キロと聞いています。家の荷物が３０キロというのはわずかなんですよ。それで皆一番大切なものだけ持ちました。私は自分のリュックに仏様と子供の下着を持ちました。他の家の人は振り袖のようなきれいな布をたくさん持ちました。しかし、これらの荷物は上陸した後、移動するとき盗まれてしまったそうです。荷造りの仕方で中身が何なのか、大事な物が入っているということが分かってしまったようです。私の父は、アルバム４冊と蓄音機を持ちました。途中で荷物検査があるのですが、無事荷物検査を通過したようです。この荷物検査で引っかかると、皆没収されてしまうんです。この荷物検査を無事通過した父のアルバムと蓄音機は、日本に帰ってから活躍することになり、島の様子を写した写真集とか祖父や祖母の写真はないかと遠くから訪ねてくる人も大勢いました。父のアルバムは、ぼろぼろになって実家に残されております。蓄音機も島にいた頃は、近所の人が集まって浪花節などをかけて楽しんでいましたが、引き揚げてきてからは娯楽の少ない時代でもあり、村の演芸会やお祭りなどに使われていました。ようやく９月半ばを過ぎた頃、日本の引き揚げ船で函館に入港しました。ところが、赤痢ははしかなど伝染病がはやっており、上陸できませんでした。頭から、首から、背中からお腹まで息ができなくなるくらいに真っ白なＤＤＴをかけられました。そんな格好をして１週間くらいは船の上にいました。その後上陸しましたが、皆、島を出てから１ヶ月くらい経っているので、栄養失調のような状態で多くの人が亡くなりました。せっかく病院に入院できても、良い食べ物はありません、良い薬もありません、そのような状況なので、亡くなる方が多く出ました。村長さんの娘さんも小学校の４年生と５年生でしたけれども２人とも亡くなりました。１０代のお兄さん（皆さんと同じくらいの年齢）は一人ずつ背負って火葬場に行き、火葬してもらったそうです。皆さん想像できますか。小学校４年生、５年生の妹の亡骸を背負って火葬場に行けますか。そのお兄さんの下の妹さん達やお爺ちゃんも入院していたのですが、お爺ちゃんはそっと息を引き取って亡くなったそうです。１年生と３年生の妹さんも病院に入院していたのですけれど、病院にいたら死んでしまうと思って、二人のお兄さんが病院に入院していた妹さんを引き取って、家に連れてきて看病して助かったそうです。その妹さん方

は１０年くらい前に亡くなってしまったんですけれど、お兄さん方に非常に感謝していたそうです。村長さんは、村人の半分を村に残してきたので、翌年無事に引き揚げてくるかを確認するまで函館を動こうとせず、また、公職に就くことができなかったので、二人のお兄さん達のアルバイトで生活をしなければならず、苦しかったそうです。引き揚げてきた人達は、それぞれ親戚縁者をたよって全国へ旅立って行きました。引き揚げの時一緒だった叔母さん家族は、無縁故ということで網走管内小清水町へ行きました。私たちも親戚縁者がなかったのですけれど、根室管内別海町に行きました。今は、人の数より牛の数の方が多いという立派な酪農地帯になっていますが、戦後の食糧事情は引き揚げ者ばかりでなく、皆が貧しく品不足だったので物が手に入らないそんな時代でした。その頃私は幼かったので、少々寒かったり、お腹がすいたりしてもまだ幸せな方でした。

今の蘂取島の様子をお話しします。私の故郷の蘂取はもう人は住んでおりません。ここに紗那（しゃな）という町があります。紗那は択捉島の中心になっている町で、ここには大勢人が住んでおります。初めて墓参で島を訪れた２０年前（平成３年）には、写真も撮影することが制限されました。それから警備隊が銃を持ってついてきました。随分怖いと思いました。しかし今では、墓地の草刈りをしてくれたり、またカニをご馳走してくれたりします。島の暮らしは豊かなようで、住民の服装もきれいになっております。国後島に住んでいるロシア人は日本の中古車を持っております。乗用車の他に何々商店と屋号の入った大きな文字の入ったトラックなどが走っております。お店の棚にも商品はたくさん並んでおります。幼稚園、学校、病院などは新しく建てられております。また、飛行場の建設、港の拡充、道路の拡幅工事、道路の舗装などインフラがかなり進んでいます。今住んでいるロシア人は、日本人ともっと仲良くしたいというお話しをしておりました。私の話はこれで終わります。